

梶井基次郎

器樂的幻覺



器樂的幻覺

ある秋フランス仏蘭西から来た年若い洋琴家ピアノリストがその国の伝統的な技巧で豊富な数の楽曲を冬にかけて演奏して行ったことがあった。そのなかには独逸ドイツの古典的な曲目もあったが、これまで噂ばかりで稀まれにしか聴けなかった多くの仏蘭西系統の作品が齎もたらされていた。私が聴いたのは何週間にもわたる六回の連続音楽会であったが、それはホテルのホールが会場だったので聴衆も少なく、そのため静かなこんもりした感じのなかで聴くことが出来た。回数

を積むにつれて私は会場にも、周囲の聴衆の頭や横顔の恰好にも慣れて、教室へ出るような親しさを感じた。そしてそのような制度の音楽会を好もしく思った。

その終わりに近いあるアーベントのことだった。その日はいつもにならない落ちつきと頭の澄明を自覚しながら会場へはいった。そして第一部の長いソナタを一小節も聴き落すまいとしながら聴き続けていった。それが終わったとき、私は自分をそのソナタの全感情のなかに没入させることが出来たことを感じた。私はその夜床へはいってからの不眠や、不眠のなかで今の幸福に倍する苦痛を

うけなければならぬことを予感したが、その時私の陥っていた深い感動にはそれは何の響きも与えなかつた。

休憩の時間が来たとき私は離れた席にいる友達に目^{めく}眩^ばせをして人びとの肩の間を屋外に出た。その時間私とその友達とは音楽に何の批評をすることもなく黙り合つて煙草を吸うのだったが、何時の間にか私達の間できまりになつてしまつた各々の孤独ということも、その晩そのときにとつては非常に似つかわしかつた。そうして黙つて気を鎮めていると私は自分を捕えている強い感動が一種無感動に似た気持を伴つて来ていることを感じた。煙草

を出す。口にくわえる。そして静かにそれを吹かすのが、いかにも「何の変ったこともない」感じなのであった。

——燈火を赤く反映している夜空も、そのなかにときどき写る青いスパークも。……しかし何処かからきこえて来た軽はずみな口笛がいまのソナタに何回も繰返されるモティーフを吹いているのをきいたとき、私の心が鋭い嫌悪けんおにかわるのを、私は見た。

休憩の時間を残しながら席に帰った私は、すいた会場かいじやうのなかに残っている女の人の顔などをぼんやり見たりしながら、心がやっと少しずつ寛解して来たのを覚えてい

た。しかしやがてベルが鳴り、人びとが席に帰って、元のところへもとの頭が並んでしまおうと、それも私にはわからなくなってしまうのだった。私の頭はなにか凍ったようで、はじまろうとしている次の曲目をへんに重苦しく感じていた。こんどは主に近代や現代の短い仏蘭西の作品が次つぎに弾ひかれていった。

演奏者の白い十本の指があるときは泡を噛かんで進んでゆく波頭のように、あるときは戯たわむれ合っている家畜のように鍵盤に挑いどみかかっていた。それがときどき演奏者の意志からも鳴り響ひびいている音楽からも遊離して動いて

いるように感じられた。そうかと思うと私の耳は不意に音楽を離れて、息を凝らして聴き入っている会場の空気に触れたりした。よくあることではじめは気にならなかったが、プログラムが終りに近づいてゆくにつれてそれはだんだん顕著になって来た。明らかに今夜は変だと私は思った。私は疲れていたのだろうか？ そうではなかった。心は緊張し過ぎるほど緊張していた。一つの曲目が終わって皆が拍手をするとき私は癖で大抵の場合じっとしているのだったが、この夜は殊に強^しいられたように凝然としていた。するとどよめきに沸き返りまたすーっと

収まっつてゆく場内の推移が、なにか一つの長い音楽のなかで起ることのように私の心に写りはじめた。

読者は幼時こんな悪戯いたずらをしたことはないか。それは人びとの喧噪けんそうのなかに囲まれているとき、両方の耳に指で栓せんをしてそれを開けたり閉じたりするのである。するとグワウツ——グワウツ——という喧噪の断続とともに人びとの顔がみな無意味に見えてゆく。人びとは誰もそんなことを知らず、またそんななかに陥っている自分に気がつかない。——丁度それに似た孤独感が遂に突然の烈しさで私を捕えた。それは演奏者の右手が高いピッチの

ピアノニツシモに細かく触れているときだった。人びとは一斉に息を殺してその微妙な音に絶え入っていた。ふとその完全な窒息に眼覚めたとき、愕然がくぜんと私はしたのだ。

「なんとという不思議だろうこの石化は？　今なら、あの白い手がたとえあの上で殺人を演じても、誰一人叫び出そうとはしないだろう」

私は寸時まえの拍手とざわめきとをあたかも夢のように思い浮かべた。それは私の耳にも目にもまだはつきり残っていた。あんなにざわめいていた人びとが今のこの静けさ——私にはそれが不思議な不思議なことに思え

た。そして人びとは誰一人それを疑おうともせずひたむきに音楽を追っている。云いようもないはかなさが私の胸に沁しみて来た。私は涯はてもない孤独を思い浮かべていた。音楽会——音楽会を包んでいる大きな都会——世界。……小曲は終わった。木枯こがらしのような音が一しきり過ぎて行った。そのあとはまたもとの静けさのなかで音楽が鳴り響いて行った。もはやすべてが私には無意味だった。幾たびとなく人びとがわっわっとなってはまたすーっとなつて行ったことが何を意味していたのか夢のようだった。

最後の拍手とともに人びとが外套がいとうと帽子を持って席を立ちはじめると、私は病氣のような寂寥せきりょうで人びとの肩に伍して出口の方へ動いて行った。出口の近くで太い首を持った背広服の肩が私の前へ立った。私はそれが音楽好きで名高い侯爵だということを知った。そしてその服地の匂いが私の寂寥を打ったとき、何事だろう、その威厳に充ちた姿はたちまち萎縮いしゆくしてあえなくその場に仆たおれてしまった。私は私の意志からでない同様の犯行を何人もの心に加えることに云いようもない憂鬱を感じながら、玄関に私を待っていた友達と一緒にになる

ために急いだ。その夜私は私達がそれからいつも歩いて
出ることになっていた銀座へは行かないで一人家へ歩いて
帰った。私の予感していた不眠症が幾晩も私を苦しめた
ことは云うまでもない。

——一九二七年十一月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館